批判と反省

東と西との結び方

——歴史と国民感覚——

越智武臣

編集部から私に与えられた論題は、「日本史研究にのぞむ」という趣旨のものであるらしい。だが、身の程わきまえた研究者なら、そんな大それた註文に、おいそれと応じられる道理がない。盲人蛇に怖じずの愚だけはおかしたくないからであり、痴呆の願いは笑われても、聞き入れられるとは考えないからである。けれども、私もまた現実には日本の歴史のなかに育くまれながら、しかも研究としては外国の歴史を手がけてきたものとして、人に望むよりさきに、自分自身で考えてみたいことは、いろいろある。少し大げさないい方だが、近代日本における西洋人文の研究者が、いずれは逢着しなければならぬ宿命的な問題を、祖国そのものを対象とする研究者の問題設定とからませてみること、できれば、そこにともに新しい史学の方向をまさぐつてみること、それがこの小稿で、私が語りうるギリギリの論点になろうか、と思う。

戦後十五年、外国史研究といわず、日本における西洋学研究も、戦前に較べれば格段の進歩をとげた。それは専門の分化にみられ、年々量産される個別研究の数によつても知られる通りである。現在では、すでに消失してしまつた名もない英国一小寒村の、何年何月の羊の数さえ数えかねない論文に接するとき、そも日本人というものが、西洋研究に注ぐいたましいまでの執著を感じるのは、私だけでもあるまい。ことは史学にのみ限られない。外国文学研究においても、スタンダールの家賃の計算までが、まともに語られる現状である、ときく。[1] 日々大学の門に立てかけられる片仮名文字の看板をみよ。この東の国では、ケネーの『経済表』発表二〇〇年記念が知らされ、デフォーの生誕三〇〇年が祝われ、「カトルズ・ジュイエ」だといつて、ベレー帽は祝杯をあげるのだ。かつて詩人朔太郎にとつて「フランスは余りに遠い」ものであつた。そのフランスやイギ

リスは、こんなに近いものとなつたのだろうか。近いとすれば、研究が微に入り、細を穿つてなんの不思議もない。だが、もう少し考えれば、遠近の距離は東西にとつて相対的なものでもあるはずだ。ところが、西においては、東とは逆に、私は余りにも遠い「知られざる日本」を嘆くことが多かつた。だからこそ、いままでは当然のことと考えられてきた、これら洋花の燎爛に、少なくとも私は、こと新しく驚かされずにはいられないのである。

ここで、知るは知らぬに優る、という説も成り立つ。しかし、いかに咲いても、徒花はあくまで徒花だ、ということも依然事実である。ところで、この「知る」ということであるが、たとえば天然記念物化した京都という東洋の古都の名を知る人は少いが、あるいは『北海道』、あるいは『日本経済の復興』という着眼のもとに、年数点の日本研究を読みうる国人と、天然記念物化した中世開放耕地の残存やストラットフォード・オン・エイヴンに、一片の学問的旅愁を憩わせることの多いこの国人とでは、「知る」ということの質がそもそも問題ではないか、とも思う。また、同じ記念物でもよい。西欧の古刹に嘆仰するさきに、はたして幾人が、京都の古寺の輪奐の美に誘われたであろうか。こう考えてくれば、「知る」ということ、すなわち専門分化ということが、西洋学においても、たとえ不可避な方向であるとはいえ、それが手放しでは慶賀できない、ひとつの理由が明らかになつた、と思う。だが、この専門分化ということも、もう少し些細に眺めてみると、わが国における場合は、その事実知識の深化が、多くの場合、外国のそれに促がされた結果であること、いや、それを要約したもの、その意味でかならずもオリジナルなものでないことは、誰よりも研究者自身がもつともよく知つている。朔太郎ではないが、フランスは依然として遠いのである。また、稀なことではあるが、たとえオリジナルなものであつても、何年間かをそれに費して調べ上げるしかじかの結果が、スタンダールの家賃であつたとすれば、それがいま極東に生きるわれわれと、どう関係をとり結んでいるのか、という根本的な問題は去らない。それらは、およそ専門研究の進むにつれて、外国研究者の心にわだかまるシコリとして、腫れひろがつてゆくように思われる。この点、祖国という安定した台座のうえで、研究のひとこまひとこまが、骨肉の一部を明らかにしている、という安心感に棹さす——たとえ無自覚でも——日本史研究者との差異を、外国史研究者は、そうなつた刹那から形影のごとくあい伴わねばならぬ。もちろん、かくいうことも、オリジナリティなどというものは頭から否定して諦観するもの、人のフレームのなかを突走つておれば、なにかやつている気になつているもの、研究は個人的趣味の問題だとして、高をくくつた祖国忘失者には、もともと崩しようもない疑念ではある。だが、

その祖国忘失者さえ、外国渡航のさいは、歴とした「日本国民」のパスポートをたずさえるのだ。そして、もしもかれらが、現代という国際状況のなかで、自己の背中に焼きついたこの「国民」の烙印と自己の思想とのあいだのギャップを考えないとすれば、それは知性の弱さというほかない。

つまり、外国研究者は、一方ではいやおうなく、「ネイション」という足場に立ちながら、他方ではその全能を外国文明の究明に捧げる。現に天井の木目をみながら、思念は石の迷路をさまようのである。したがつて、その学的情熱が高まれば高まるほど、両者の緊張関係は、ますますはげしいものとなる。この関係はどうして解かれるのであろうか。あるいはついに解かれないのであろうか。

このような緊張を突破する方向が、従来示唆されなかつた、というのではない。ここで観念的な祖国脱出者は問題外におくとして、その方向のひとつは、外国に古典をみ、それを拠るべき規範とし、またそこまでの到達可能性を考えたひとびとである。おそらく、この方向は古来、ことに明治以降は、外国研究のもつとも支配的な姿勢であつた、といつてよい。もちろん、この方向にも、その態度において、軟硬さまざまなものがあつた。そして、この方向が、軽跳な欧化主義をも含めて、支配的であつたがゆえに、その半面に暗黒な超日本主義のネメシスが借んでいたことについては、ここにふれるまでもない。しかし、この方向が真剣であるとき、それがある程度には、すぐる「暗い谷間」の光とはなりえた。したがつて、敗戦と同時に、その谷間を通りぬけたとき、ふたたびそれが澎湃たる光芒となつて現れもしたのである。この方向とは、例を自分の専門としてきた英国史にとれば、そこに資本主義の古典的発展をみ、議会主義の完成をみ、近代人のエートスをみ、またあるものは社会主義の雛型を、要するに近代化の古典をみる、という行きかたであつた。この近代主義に安住しえないものは、古典を他処に求めた。だが、古典を外国に仰ぐ、という心的態度は、いずれ変らぬものである。私はこの方向の善意を信ずるものであるし、二、三の唯我独尊的な西欧諸国民には真似のできぬ積極的な国民的資質だとさえ思つている。けだし、他の長所を見ることができず、これを白眼視することしか知らぬものに、向上を期待することの不可能なこと、人間社会だろうが、国際社会だろうが、同断だからである。だが、ここで注意すべきは、このような方向をもつてすれば、すなわち外国に古典を仰ぐ、という方向からすれば、たとえば「英国は、最後まで封建制度の形骸にしがみついている国家のひとつである」[25]という言葉の意味は理解できない。はやい話が、そこには世襲王家があり、貴族がおり、パブリック・スクールがある。また、大方の英国訪問者がそこに感じる一種のスノッビズムさえ、ジョージ・オーウェルと

ともに、私もまたこれを英国国民性の重要な要素だ、と考えたい。英国が古典的近代であつたということは、B・B・C放送の英語が古典的だ、ということに等しい。それは民衆の一表層にインテリジブルであるにとどまる。つまり、視角をかえれば、英国に古典的近代をみると同様、封建的残滓のこれほど多い国もまた稀なのである。それに、もひとつ重要なことは、たとえば英国を古典視した見解の行きついた欠陥は、大英帝国（現在ではコモンウェルス）の現実を視野のそとに外してしまつたことだ。大英帝国の樹立が、古典的な資本主義発展の帰結である、という説明はついても、植民主義の現実と資本主義の搾取性は、古典性という価値的なヴェールのかげにおしかくされてしまつたのである。戦後隆盛をみたわが国英国史研究の現状をみても、そこにどれだけの大英帝国論があつたか。あるものは、こういつて、言いすぎでなければ、「イングランド」問題のますます微に入り、細を穿つ研究のみであつた。これだけの説明によつても、外国史研究のこの方向が、根本的にはそのメンタル・アティテュードそのものが、問題を含むことを知る。前言したように、私はこの方向のメリットを十分に認める。が、同時に永年の国民的心術となつた西欧古典視の歴史観が真の歴史的現実の把握をさまたげるものであることをも恐れるのである。

外国研究の第二の行き方は、外国の社会発展とかあるいは思想展開のなかに、われわれのそれとの共通項をみいだそうとする方法である。外国研究が一定の限度に達するとき、そこに空間をこえた意外な近似性を見出すのは、これまたわれわれの学問的経験の教えるところである。こうして、外国文学に対する共感が芽生えるばかりでなく、氏族制・封建制・荘園制・地主制・絶対主義・市民革命等々もまた問題となりえ、やがて歴史発展の合法則性という解釈が生れる。そしてこの合法則なる前提のうえに、彼のメジュアは我のメジュアとなり、我のメジュアはまた彼のメジュアとなる。この方向が「比較研究」というひとつのジャンルにおいて、実のり多い方法であることは、ここに再言するまでもない。だが、この彼我の共通性認識にいたる過程と平行して、正しくそこに、外国史ならびに外国文明の異質性認識という過程がはじまることも、これまた経験の教えるところである。現にこの共通性認識の過程において、われわれは暗号解読法にも似た言語学的操作をくりかえさねばならぬ。そして、この共通観念の取得そのものが、実は言語学的な翻訳の結果であることが多いのだ。こうして、共通タームは、翻訳された途端にその内実が捨象され、逆にその内実がわれわれの経験的知識で充塡されている場合の多いことに注意する必要がある。結局描いているのは、自国のイメージにすぎないということを。そこを反省すれば、言語の背後にあるかれの現実に、われわれは案外遠いことに気

がつく。たとえば、簡単な文字の羅列にすぎぬアングロ・サクソン的表現の意味するものに、至難を感じるのは、天下の孤語を語る日本人だけではない。英語がいちおう共通語となつた、アジア・アフリカのある種の文化世界においてもまた同様である。いな、それがもつとも簡単であるがゆえに、もつとも至難なアングロ・サクソン的個性がそこにあるとさえいえるのである。私はここで横光利一の『旅愁』の一節を思いだす——

僕なんな考えていたのと、やはりヨーロッパは少し違うな。これはこちらの方が文化が高いからだというんじやありませんよ。つまり頭の呼吸の仕方が違うんですね。僕なんかどちらかというと、来るまではヨーロッパ式の呼吸の仕方だつたんですが、しかし心はやはり、日本人の呼吸だつたということが、少しばかり分かりかけてきましたね。

私は、この言葉はなにげないようで深刻だ、と思う。そして、大なり少なり、日本における西欧研究者がいつかは行きつく十字路であるように思えてならぬ。そこで、行つた道をとつてかえすものもある。横にそれるものもある。十字の真中で逡巡したあげく、正路を発見するものもある。しかし、それはともかく、共通性発見といつたこの研究方法も、一方においてこの異質性に開かれた眼によつてバランスされないかぎり、遠くからみるときは、対象について実に滑稽な像を映すことになりかねない。それは、たとえば、英国史研究における寄生地主論のごとき、日本史研究の結果を適用した、性急な共通概念の輸出として、あるいはその逆として、学界というせまいコップのなかに、一時の問題をおこすことはあつても、決して永続きするものではない。

くり返していつておくが、私は外国研究の、以上二つの方向の効用を十分に評価する。それが方法として、善用されるかぎりにおいて。方法が事実として強弁されないかぎりにおいて。方法であり、アプローチの仕方であるかぎり、それはたえず別の視角からチェック・アンド・バランスされなければならぬ。その余地あることを、以上の説明はのべたつもりである。一般に、外国研究といわず、外国への近接のあり方において、平衡感覚ないし国民感覚にかける、ということは、日本人のもつ通有性として、私はここで指摘しておいてよいか、と思う。それは、外国研究者のテオリーを特異な色に染め上げているばかりではない。いや、外国研究者だけの欠陥に帰すべきものでもないように思うのである。

それでは、いつたいどうしたらよいのか。西欧人によくある口吻ではないが、「東は東、西は西」なのか。それでは、問題を白紙にかえすにひとしい。ここで、私は、小稿の表題にかえるわけであるが、むしろ単刀直入に、東と西の結びつきをやるのなら、事実結び

ついた局面から始めよ、と提言したい。この際、私は、どの方法がよい、というような究極論をいつているのではない。前にものべたとおり、それぞれの方法に、それぞれのメリットはあろう。だが、もし私の間違いでないならば、この第三の方向が、従来どれほどの熱意をもつてやられてきたかに、疑問を感ずるのである。たとえば、東と西との「出会い」の歴史と、その大団円としての「鎖国」の問題、幕末維新史に対する西欧のインパクト——全く一例にすぎないが、このような問題が、もつともつと活潑にとり組まれてよいのではないか。孤立した日本の歴史にとつて、「出会い」の問題は、基本的な歴史の主流ではなかつた、という議論のでるだろうことを、私は知つている。だが、そう考えること、つまり、国際的シチューエーションのなかに、国民史を位置づけえない、ということが、案外孤立的な自国の閉鎖的歴史性に由来する眼鏡のくもりであるかも分らないのである。極言すれば、私は西洋史家の立場から、西洋史研究のあるべき姿も、この西洋と日本との「出会い」の瞬間から、研究人員のうえでも、研究密度のうえでも、幾何学級数的にふくらみをましていてこそ、本当だ、と思う。また、それがおよそ健全な常識というものだろう。また、それにはたえず日本史研究との接触を保つていることが必要なのである。

ある優秀な西洋古代史専攻学徒が、とある留学試験の席上、「日本では、それで食つてゆけるポストがあるのか」と突込まれた、ときく。私もそれに類した質問には、滞欧中いくどとなく出会わした経験をもつ。われわれは、もちろんこれらを俗物的質問として一笑に付することもできるし、またなんとでも理窟はつく。だが、俗物主義は、案外世界的なコモン・センスであることが多い。偉大な俗物のくに英国の片隅で、ときおり私はそういうことを感じた。そして、わが国西洋学の現状をふりかえるとき、この俗物主義的常識とのあまりの懸隔に、俗物主義を笑いえないある種のジレンマを感じたことも事実である。この懸隔、つまり常識論の軽視、ないしそれに対する無興趣が、おそらくわが国文化の国民的性格であるかも知れぬ。だが、一方、この性格が、たとえば、西欧へのアティチュードにおいて、一種の畸型状態を現出した経緯もまた明らかなのである。

私の提言が、まずこうした跛行状態の矯正に、いくぶんか役立てば幸いである、と思う。寒暖計のように、西と東の目盛りを立て、その温度だけを読みくらべるような歴史学に、われわれは少しく精力をさきすぎた。いや、それもまだまだ必要であるだろう。だが、ここらあたりで、現実の歴史の交錯のなかに身をおいて、歪められた平衡感覚をとりもどさねばならぬ。ますます交渉をましてゆく、東西史のなかで、今後のわれわれの課題実現のためにもその相対感覚は必要なのである。学問研究のうえにおいても、日本史家と西洋

史家とが、別々の史料に読む目盛りをあげつらうばかりでなくて、東西結びついた局面の同一史料のうえに brood over する日のあることを、私は待望する。そこに、東西史家ないし研究者の、限りなくも豊かな協力の場がひらける、と思う。身近くは、史学科本来の機能も発揮できる、と考えるのである。が、これもまた、もの知らぬ痴呆の願いであろうか。

最後に、私は、さきにも引用したことのあるジョージ・オーウェルのことばを思うのだ。「何といったって、それは君の文明だ。それは君自身なのだ。いかに憎もうが、笑おうが、片時もそれから離れて、心安らかであるはずがない。」この奇特な社会主義者が、ここで「君」といっているのは、もちろんイングランドのことである。だが、膳を向けかえたうえで、私もまたこのギリギリ結着の立場をば、あらゆる文化認識の出発点だ、と信ずる。自国文化に口笛吹いてすましている歴史家を私は軽蔑する。

① 加藤周一「外国文学のうけとり方と戦後」(『文学』二八号五巻、一九六〇年)五頁。

② George Orwell, England, Your Englaud, 1959.

〔付言〕同様な発言を私は以下のものでも書きつけておいた。「英国地方史研究管見(四)——外国史をどううけとるか——」(『西洋史学』47号、一九六〇年)「新しい国民史研究の提唱」(『新しい歴史学のために』一九六〇年)

史学研究会例会予告

日　時　六月三日(土)午後一時

場　所　京都大学史学科第二教室

講師・演題

「太閤検地論」の批判に答える　　宮川満氏